

発達障害のある 学生への就職支援 サポートブック



発達障害の
ある学生の
就職に関する
基礎資料
付き

現在、日本の高等教育機関には多くの障害学生が在籍しており、その人数は増え続けています。中でも、特に、発達障害、精神障害、病弱・虚弱の人数の伸びが顕著です。発達障害のある学生の人数は、平成29年度現在、5,174人です。加えて、昨今は、統計データ上はカウントされていなくても、発達障害の可能性があり、何らかの支援を必要とする学生や、大学に支援を求めていないものの、周囲が配慮の必要性を感じる学生の存在もクローズアップされています。

学生自身が障害特性を自覚しているか否かに関わらず、彼らが就職活動で苦労する事例がよく見受けられること、学校として障害学生への「合理的配慮」が求められるようになったこと等から、高等教育機関における彼らへの修学支援・就職支援の提供が急務となっています。

現在、発達障害のある学生は様々な理由から就職活動で苦戦を強いられることが多く、障害学生の中でも発達障害のある学生の就職率は相対的に低い36%となっています。一方、学校側では、この問題に対する課題認識はあるものの、具体的な支援体制や支援プロセス等を整備できているところは少ないのが現状です。

株式会社エンカレッジでは、これまで、発達障害のある学生や卒業生の就職支援を専門に行なってきました。そこで、学校の障害学生支援や就職・キャリア支援の担当者から、発達障害のある学生の就職支援について相談を受けるケースが増えています。現時点では、学校においてそのような学生の就職を支援する際に、その全体像や適切な方法等について知る機会は多くありません。

そこで、発達障害のある学生の就職活動における全体像を把握し、適切な支援ができるようになること、また、外部の支援機関等にアクセスする際に参考となる情報を提供することを主な目的として、本サポートブックを制作しました。

こんな皆様におすすめです。

- 初めて発達障害のある学生に関わるので、基本的なことを知りたい
- 就活支援において、どのようなサポートが必要かを知りたい
- 発達障害のある学生の卒業後、どのように外部につなげるべきかを知りたい

といった困り感を抱える学校関係者

また、巻末には、発達障害のある学生の就職に関する基礎的な資料を掲載しています。学校関係者だけでなく、この問題に関心を持ちはじめたすべての方々に、発達障害や、就職活動に困難さを抱える学生の就職状況について理解を深める一助となれば幸いです。

発達 障害って？

発達障害の特性と
対応のポイントを
理解しよう

学生への就職支援
発達障害のある
サポートブック



Chapter | 01 発達障害って? ～発達障害の特性と対応のポイントを理解しよう～

発達障害のある学生が、学校内で困りごとを抱えることが多く見られます。一体なぜ困りごとが起こっているのでしょうか？

まず、発達障害は、脳機能の発達に偏りがあることが原因で起こる障害であり、得意、不得意分野の差が激しいという特徴があります。得意、不得意分野自体は誰にでもあるものですが、発達障害のある人の場合、不得意が学業・人間関係・就職活動などに支障をきたすほどの困難さとして現れることもあります。

しかし、その原因は、あくまで脳機能の障害であり、本人の努力不足や、親のしつけの問題ではありません。もちろん、努力によって適応できる部分も人によってはあるかもしれません、本人の努力不足として、さらなる努力を促しても、解決に至らないことが多いです。

発達障害の障害種別は、大きくASD系、ADHD系、SLD系の3つに分類されます。どれか一つの特性がある方もいますが、重なり合った特性を持っている方も多いです。

【ASD】 自閉症 スペクトラム

- ・社会性・対人関係の障害
- ・コミュニケーションの障害
- ・こだわりの障害
(アスペルガー症候群、自閉症など)

【ADHD】 注意欠如 多動性障害

- ・集中できない
- ・不注意・ミスが多い
- ・衝動的な行動をとる

【SLD】 学習障害

読む、書く、計算などが知的発達に比べて著しく難しい

【ASD(自閉スペクトラム症)の特性】

ASDは自閉スペクトラム症と言い、過去には、自閉症、アスペルガー症候群等とも言われていました。現在もその名称が使われていることが多いです。ASDは、「社会性(対人関係)」、「コミュニケーション」、「想像力」の三つの特性をもっており、これを「三つ組みの障害」と呼びます。

社会性の 難しさ

- ・非常識と思われる行動
- ・暗黙のルールが伝わらない
- ・協調性が少なく、人とうまく関われない
- ・正直すぎたり、感情表現がストレート

コミュニケーションの難しさ

- ・話がみ合わない、一方的になりがち
- ・人の話を聽けない
- ・表現が独特で堅苦しい、またはその逆
- ・表情から意図をつかみにくい

想像することの 難しさ

- ・相手の気持ちが読み取りにくい
- ・興味の偏り、こだわりが強い
- ・臨機応変な対応、予定の変更が苦手
- ・複数処理ができない
- ・気持ちの切り替えが苦手

学校生活の中では、少人数制の授業やグループワーク、実験やフィールドワークへの参加に苦手さがあり、先生の指示に対して解釈を誤り、突飛な発言や行動が見られることがあります。先生や友人と上手く人間関係を構築できずに孤立してしまう等の困難さに直面する学生もいます。

相手の気持ちを想像することの苦手さから、一方的に話し過ぎたり、相手の表情から意図を読み取れず、場にそぐわないことを言ってしまうこともあります。たとえば、相手が何度も時計をチラチラ確認していて、「何か予定があるのかな?」「会話がつまらないのかな?」等と感じる場面があったとします。しかし、言語外の意味が想像しにくい特性がある人や、複数のこと(この例では「自分の会話」と「相手の表情・気持ち」)を処理することに苦手さのある人は、それに気づかず自分の話を続けてしまう人もいるのです。同時に並行の苦手さから、相手の話を聞きながらうなづきやあいづちを打つことができない人も少なくありません。

また、本人なりのこだわりや興味関心に偏りすることはよく言われています。たとえば、サークルで1時間のミーティングを予定していたとき、話が白熱すると予定の時間を過ぎることはよくある話です。しかし、時間にこだわりがあり、予定の変更が苦手なASDの人は、1時間過ぎると途端にソワソワしたり、話し合いが途中のままでも帰ってしまう人がいます。何か予定があるのか尋ねても「ない」と答えるのですが、ではなぜ帰るのか尋ねると「1時間が経ったから。」と答えます。ASDの特性を知っている人からすれば「○○さんなりのこだわりがあるのね」と理解できることもあります。初めて接する人からするとびっくりされることもありますが、特性の一つとして捉えたり、ミーティングの時間順守を徹底する等の取り組みにつなげてもらえばと思います。

ASDの学生は、上記の特性から人間関係等において失敗経験をしてきた人が少なくありません。そのため、人と関わることに抵抗感を持っていたり、自己肯定感の低さ、いじめ等の経験から二次障害がある学生もいます。一方で、特性により強みを發揮できることもあります。たとえば、時間や約束をきっちり守ることができる、授業は休むことなく毎回出席できる、タイムキーパーの役割を担ってもらうと非常に高い精度でタイムキープできる等です。

●ASDの学生への対応のポイント

認める

本人なりに考えた結論を一蹴しない	本人の興味・関心に合わせたアプローチ	こだわりを活かすうまく付き合う
<ul style="list-style-type: none"> ・レポートや志望動機、自己PRなどが不完全でも、本人なりに真剣に考へて書いたことを認める。 ・突飛な発言があっても、頭ごなしに否定しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の得意なことや好きなことの話題に触れながら会話をし、信頼関係を築くことができるようアプローチする。 ・強みにフォーカスし、それを伸ばすための本人の成長プロセス(方法や手段)を考える。 	<p><時間にこだわりのある人の場合></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミーティングではタイムキーパーをさせる。 ・教員・職員も時間を守る。 ・時間通りのタイムキープをかける。時間が読めないとときは、予めその旨を伝える。

伝える	
一般的な捉え方を「知識として」伝える	誤解や勘違いをタイムリーに修正する
<ul style="list-style-type: none"> 本人の偏った認識や言動を頗るに否定しない。あまりにも一般論とかけ離れている場合は、「こんな考え方（一般的な考え方）もできると思いますが、あなたはどう思いますか？」など、考えるきっかけを投げかける。 	<ul style="list-style-type: none"> 言語外の意味を捉えるのが苦手な方は、冗談で言われたことを真剣に捉えてしまい、誤解や勘違いを生むことがあります。誤解が生じたことがわかったときは、タイムリーにそのような意図がなかったことを伝えましょう。

自立してできる方法と一緒に考える	失敗を気づきに繋げる
<ul style="list-style-type: none"> スケジュール管理アプリやスマホのリマインダー機能を利用し、忘れない環境を整えるアドバイスをする レポート作成や就活準備などは、一緒に具体的なタスク・行動・スケジュールにおとす 	<ul style="list-style-type: none"> 失敗しても努力していることを認め、肯定的にフィードバックし、どうすればよいのかを具体的な行動単位でuriaれる

経験する	
経験する機会を増やす	適切な行動をそれぞれの場面で覚える行動のレパートリーを増やす
<ul style="list-style-type: none"> 他者と関わる機会を設ける（ランチミーティングや小規模勉強会など）。 就労イメージやバイト経験のない人は、学内インターンシップなどを実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生とは元気に挨拶ができる、忙しくしている職場の人には全く声をかけられない人もいます。学生時代から、できるだけ様々な場面での経験を増やし、行動パターンを増やすことで成長に繋がります。

【ADHD（注意欠如多動性障害）の特性】

ADHDは注意欠如多動性障害と呼ばれ、不注意（集中力がない・気が散りやすい）、多動性（落ち着きがない・順番を待てない・考える前に実行してしまう）が組み合わさった障害です。不注意優位型と多動性優位型があります。

学生生活の中では、たとえば、頻繁に忘れ物をしてしまう、レポート等の提出期限が守れない、授業で集中できない、学業・アルバイト・サークル等複数のことを両立できない、研究計画が立てられない等の困難さに直面することがあります。その一方で、コミュニケーション力が高く、行動力があり、人付き合いが得意な人が多くいます。プレゼン資料の期日を守ることは苦手でも、素晴らしいプレゼンテーションができる人もいるのです。

不注意型

- 持ち物をすぐになくしてしまう
- レポートの提出期限を守れない
- 誤字脱字などがアレミスを何度も繰り返す
- 物の管理や時間管理が苦手
- 片付けられない、かばんの中がグチャグチャ

多動性

- 90分授業の集中力が持続しない
- 貧乏ゆりが激しい
- 目的なく動き回る

衝動性

- 思ったことをすぐに口に出してしまう
- 大人数の授業でも一人で何度も質問する
- 衝動買いを止められず、高価なものを買ってしまう

●ADHDの学生への対応のポイント

【SLDの特性】

SLDは、過去にはLDと呼ばれていましたが、「読み」「書き」「算数（計算）」等の特定の学習に大きな困難がある状態を指します（全体的な理解力に遅れがないところが知的障害とは異なります）。SLDは、学問としての算数や国語が苦手ということではなく、たとえば「数字の持つ順番を認識することが難しい」、「視覚的に文字が逆さまに見える」といった認知能力に凸凹がある状態で、それが学問の習得に大きな影響を与えます。

日本の高等教育機関における統計調査では、それほど多く把握されていませんが、初等中等教育では徐々に支援が広がりつつあります。今後、大学をはじめとした高等教育機関でも相談や支援の必要性が増加すると思われます。

学校生活の中では、たとえば、教科書を読むことが人よりも何倍も時間がかかる、板書の際にどの文字をどこに写していたのかわからなくなってしまう等が起こります。文字を読むというのは一見単純な行為に思えますが、文字を目で追い、文字の区切りを認識し、それを音に変換し、脳に記憶するという複雑なプロセスを経ています。読み書きに障害のある人は、そのどこかに脳機能の障害が見られ、文字の区切り目を認識することができず、文字が読めないといった苦手さとして表れます。他にも、文の読み書きは何の問題もなくできる学生が、四則演算の簡単な計算ができない等の困難さに直面することがあります。

読み書き障害

- 教科書の文字を読むことに時間がかかる
- 文字がゆがんで見える、逆さまに見えるなど

算数障害

- 数字の大小、関係性など
- 数に関する概念の理解が難しい
- 数字や計算ができないなど

●SLDの学生への対応のポイント

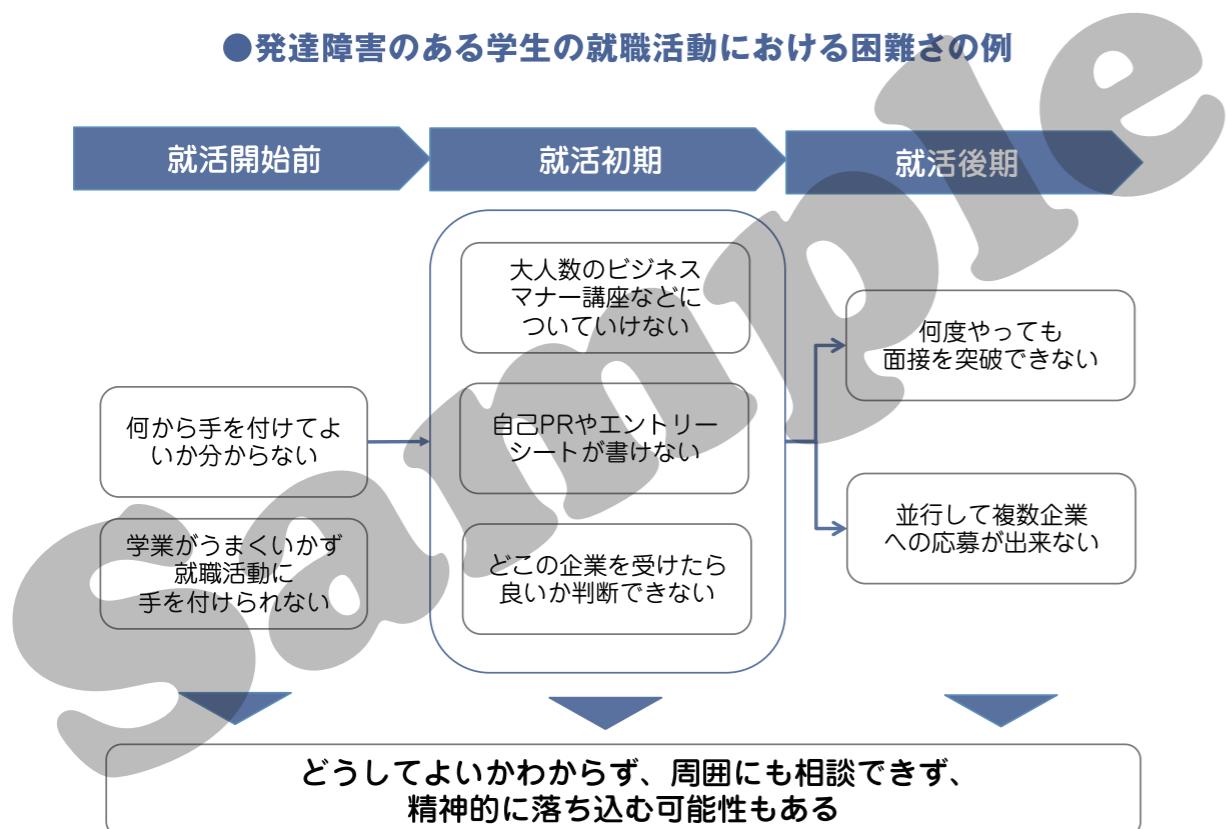
苦手なところを明確にし環境的な配慮を整える	できる方法と一緒に考える
<ul style="list-style-type: none"> SLDの学生は、就学期から気づいている学生が多い。本人、ご家族、主治医などから苦手なことや難しいことを聞き取り、明確にすることが重要。 授業の録音やノートテイク、ピアチューター制の導入など環境的な配慮を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション方法を柔軟に取り入れ、重要なことは紙に書いて渡したり、自分でメモを取るように促す。 授業の最後には、必ず次回までの宿題と一緒に確認し、確実な意思疎通ができるようにする。

Chapter | 02

発達障害のある学生はなぜ就職活動でつまずくのか？

発達障害のある学生の就職が難しい現状を学生の立場から見てみると、就職活動において困難さが発生しやすい場面がいくつかあります。

●発達障害のある学生の就職活動における困難さの例



●就活初期

学内での大人数のビジネスマナー講座や面接対策講座では、想像力に難しさのある学生にとって、経験したことがないビジネスマナーやルールを学習することに難しさがあったり、コミュニケーションが得意な学生と一緒に受けることにより、自信喪失してしまうこともあります。

発達障害のある学生は、自己肯定感が低いことも多いため、自分のアピールする点を見つけられず、自己PRが書けないこともあります。さらに、物事を抽象化することが苦手であるため、具体的な経験を整理してまとめることができず、作成に多大な時間をかけてしまったり、こだわりが強すぎてなかなか完成しなかったりというケースもあります。

就職活動においては、どの業界・職種・企業を受けるのかを決めて行動に移す必要がありますが、自分がどのような仕事ができるのかイメージできず、どの企業を受ければいいのかを判断できないことがあります。

●就活後期

コミュニケーションの困難さから、面接の場で面接官の質問の意図を汲み取れず会話が噛み合わない、簡潔に話すことが苦手で延々と話し続けてしまう等が原因で、何度受けても面接を突破できないという課題に直面します。

また、就職活動では、何社も同時に受けて、履歴書作成・面接対策等を行うことが必要ですが、複数の作業に対して段取りよく作業することが苦手なため、どれも中途半端なまま終わってしまうことがあります。特に、提出物を期間に間に合わせることが苦手であったり、不注意から誤字だらけの履歴書を提出してしまったりすることもあります。面接日時がダブルブッキングする等応募企業の選考が重なった時にどう優先順位をつけて良いかが分からず、並行して複数企業に応募できないケースもあります。

いずれの時期においても、発達障害のある学生は、そもそも自発的な相談が難しく、どこに相談をして良いかわからず、一人で悩み、精神的に落ち込んでしまう人もいます。二次障害のうつを発症し、医療機関から保健センター等につながることもあります。



●活動開始前

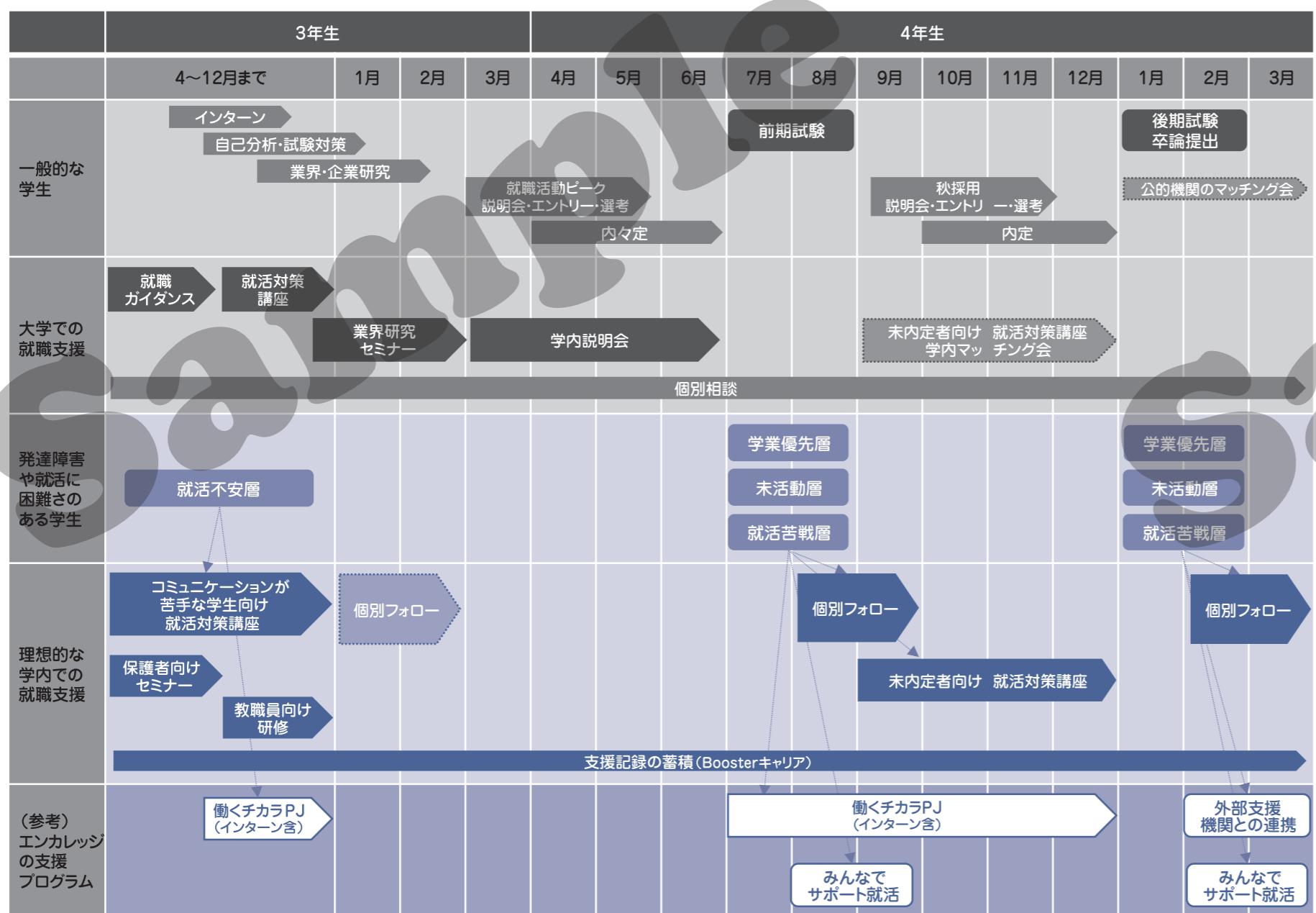
発達障害のある学生は、学業がうまくいっていないケースが少なくありません。複数のことを同時並行で取り組むことが苦手なこともあるため、卒業までの期間や取得単位数と就職活動を天秤にかけると、多くは学業を優先することになります。

また、比較的取得単位数が良好な学生でも、就職活動でやるべきことは多岐に亘り、全体の流れをつかむことが難しく、そもそも何から手をつけてよいか分からず、なかなか準備を始められないケースもあります。

Chapter | 04 就職活動の 段階別支援のポイント

一般的な就活スケジュールに加え、発達障害のある学生が陥りやすい状況と大学として取り組めるのではないかと考えられる施策について併せて記載してみました。

【一般的な就活スケジュールと発達障害のある学生への対応(例)】



①その人に合ったスケジュールを立てる

発達障害のある学生の中には、最初から障害者雇用だけを念頭に置いた就職活動を行う学生もいますが、一般的な新卒採用の流れに沿って就職活動を行う学生の方が多数派です。まずは、どの時期にどのようなことを行えばよいのかを把握し、学生と共有しながら進めることが大切になります。

発達障害のある学生の中には学業と就職活動を並行して行うのが難しい方もいます。障害者雇用においては、通年採用をしている企業も多いため、まずは卒業することを優先し、卒業後に就職活動に専念するのも一つの方法です。どちらも中途半端に終わってしまわないよう、学生にとって最適な進め方を意識しましょう。

②「働くこと」を具体化して考える

アルバイトやインターン等、働く経験を全く積んでいない学生も少なくなく、「働くこと」についてイメージできない人も多くいます。そのような学生に対して、働くことを具体的に考えもらうための3つのポイントを提示したいと思います。

①興味関心や学校生活での学びから働くことを考えることは、就職について具体的にイメージするための近道です。文系理系や学問の専門度によっても異なりますが、学問や得意なことと仕事を結びつけて考えることで、自分の将来を考えやすくなります。

②アルバイトやインターン等学内外で働くことの体験を積極的に積んでもらうと良いでしょう。アルバイトやインターンに行くことのハードルが高ければ、ボランティア活動に参加したり、先輩の体験談を聞いたりすることで学べることもあると思われます。様々な経験の機会を提供することが、働くことの魅力や、学生の成長課題を発見することにつながるでしょう。

③単に経験を促したり、考えただけではなく、考えた結果や経験をしっかりと振り返って、記録に残しておくことが大切です。発達障害のある学生は、経験したことをまとめることが苦手な人も多いので、一緒に振り返りをしながら、働く自分のイメージと結びつけてあげられると、本人にとって理解がより深まるでしょう。

③就職活動の準備を進める

就職活動準備においては、自己分析、筆記試験や面接・グループディスカッション対策、ビジネスマナーの習得等に取り組むことが一般的です。